

<b>Title</b>	徳島藩大坂蔵屋敷の建築構成について
<b>Author</b>	植松, 清志 / 谷, 直樹
<b>Citation</b>	生活科学研究誌. 6 卷, p.45-53.
<b>Issue Date</b>	2008-03
<b>ISSN</b>	1348-6926
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	『生活科学研究誌』編集委員会

## 徳島藩大坂蔵屋敷の建築構成について

植松 清志<sup>\*1</sup>, 谷 直樹<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>大阪人間科学大学人間科学部

<sup>\*2</sup>大阪市立大学大学院生活科学研究科

### Buildings layout of the Osaka Kurayashiki (warehouse-residence) of Tokushima domain

Kiyoshi UEMATSU<sup>\*1</sup> and Naoki TANI<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>*Faculty of Human Sciences, Osaka University of Human Science*

<sup>\*2</sup>*Graduate School of Human Life Science, Osaka City University*

#### Summary

In this study of Osaka *Kurayashiki* of Tokushima domain based on its *ezu* (paintings), we discuss the age of those paintings, development/transformation of the *kurayashiki* and its buildings layout. Our study revealed that the north one-third of *kurayashiki*'s site had been used for business, such as *funairi* (a water gate for vessels to get straight into the *kurayashiki*), warehouse and *komekaisho* (building for rice exchange). The central and south two-thirds had been used for residence. These were *goten* (domain lord's residence), *rusuibeya* (chief official's residence) and *nagaya* (folk dwellings) for the central portion and other officials' residences for the south portion, respectively.

**Keywords** : 徳島藩、蔵屋敷、絵図、御殿、留守居部屋

*Tokushima domain, kurayashiki, ezu, goten, rusuibeya*

## 1 はじめに

近世大坂における蔵屋敷の研究は、経済史分野での先駆的な研究に加えて、発掘調査による遺構の考古学的研究、史料の紹介と検討、蔵屋敷の設置や立地に関する研究<sup>註1)</sup>などその分野が広がりつつあるが、諸藩の蔵屋敷の施設や空間構成に関する研究は少ない。筆者らは、近世大坂における蔵屋敷の住居史的研究で西国大名と東国大名の屋敷規模や建築構成の違い、蔵屋敷が物産などの取引だけでなく、西国大名の参勤交代の際にも利用されたこと、また蔵屋敷の祭りが大坂の年中行事として定着していたことなどを明らかにしてきた<sup>註2)</sup>。しかし、大坂蔵屋敷関連の史料の多くは諸藩の地元に残されている場合が多く、搜索や調査などに様々な困難がつきまとうなかで新たな発掘に務めている。

本稿では、今回閲覧調査を許された徳島藩大坂蔵屋敷

絵図<sup>註3)</sup>を紹介するとともに、主に同蔵屋敷の建築構成について考察する。

徳島藩大坂蔵屋敷絵図の大きさは、縦1705mm×横770mm、全面に1間間隔で碁盤目状に罫線が引かれ、その上に彩色された用紙を貼った着彩貼図で、縮尺は1間を約12mmで表した4分計である(図-1)。

絵図の作成年代や経緯は記されていないが、図中の長屋に記された「竹内市左衛門」が、文化2年(1805)3月17日に国元に「大坂御留守居手代より召出」されていることから、これ以前の作成であることが分かる<sup>註4)</sup>。

## 2 徳島藩大坂蔵屋敷の変遷

### 1) 徳島藩の概要

徳島藩は、天正13年(1585)の豊臣秀吉による四国平定に際し、蜂須賀家政が父正勝の功により阿波国17万

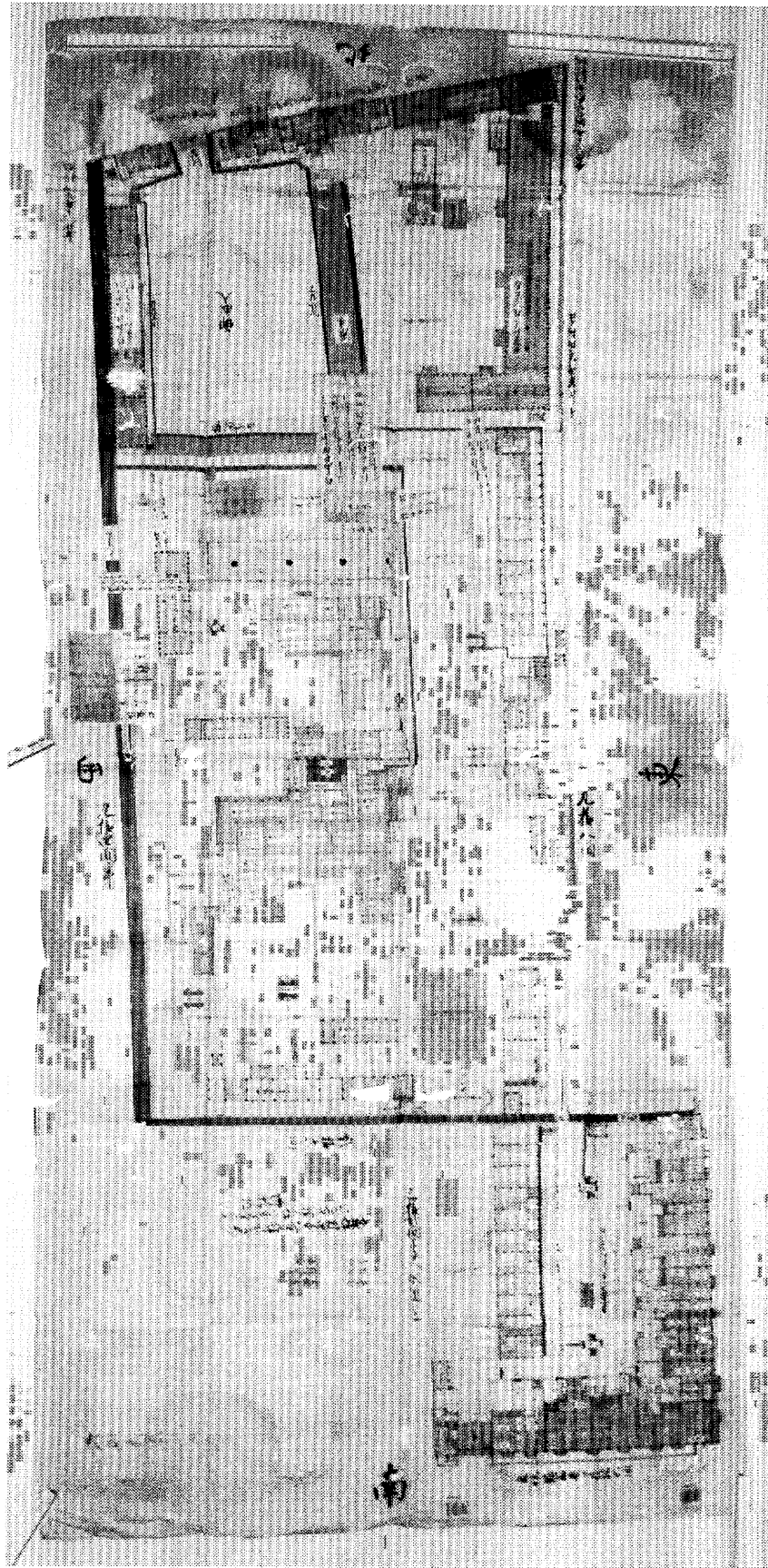


図-1 徳島藩大坂蔵屋敷敷絵図

5000石に封ぜられたことに始まる。慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いにおいて家政は家督を至鎮に譲り、所領を豊臣秀頼に返上したうえで東軍に参加し、戦後、徳川家康から改めて阿波国が与えられた。さらに、元和元年（1615）の大坂夏の陣の後に淡路国7万石が加増され、25万6000石余の藩領が確定し、明治初期の廃藩置県まで14代にわたって継承された<sup>註5)</sup>。

## 2) 大坂蔵屋敷の変遷

徳島藩大坂蔵屋敷に関する記事の概略を表-1<sup>註6)</sup>に掲げる。同表によると、徳島藩は寛文3年（1663）には立売堀と濃人橋に屋敷を設けていたが、後者は無用となり売却された。また、藩が所持し、屋敷の前に係留されていた船は、干潮の際に急な御用に使用できないため方々の屋敷へ「壱艘宛」預けられた。

延宝7年（1679）に江戸堀3丁目南側に屋敷、土佐堀に蔵屋敷が確認される<sup>註7)</sup>。屋敷と蔵屋敷が分けられていることから、後者は蔵物などを保管するための施設であったと考えられる。

元禄4年（1691）、中之島に屋敷が完成した。位置は不明であるが、同16年には土佐堀北側の㊦が徳島藩蔵屋敷として確認される（図-2の▲印）。図-2の徳島藩に隣接する㊤と㊧（ともに高松藩）、㊨（丸亀藩）の配置形態は文化3年まで続いている（図-3の破線で囲まれた部分）。そこで元禄4年以前の状況を見ると、図-2の㊤と㊧の高松藩は、貞享4年（1687）時点でも同位置で「松平讃岐守」として確認されるが（図-4の▲▼印）、㊤の西隣は「松平大和守」と記されている。この松平大和守は、延宝7年に同場所で屋敷を所持した姫路藩主松平大和守直規であるが、同人は天和2年（1682）2月に豊後国日田に移封されており、貞享4年当時の藩主本多中務大輔の屋敷は淀屋橋北詰の上中之島に設けられ、元禄16年にも同所で確認される（図-2の㊯▼印）。

以上のことから、元禄4年に徳島藩が屋敷を普請した

表-1 徳島藩大坂蔵屋敷関連事項

年	月・日	西暦	記事概略	出典
寛文	3	1663	立売堀濃人橋御屋敷・両御家守之儀尤ニ思召（後略） 御船御屋敷之前ニ置候得共、漸干申候へハ俄之御用ニ立不申候故、方々屋敷へ壱艘宛預ケ置申候 濃人橋三間半之御屋敷売払申事、此御屋敷之儀売申候、先無用ニ可仕（後略） 御屋敷之前御船道具入納屋普請之事	A
延宝	7	1679	屋敷：江戸堀3丁目南側、蔵屋敷：土佐堀	B
	4	1691	今年大坂中之島御屋敷御屋上御普請出来	C
元禄	9	1696	大坂御留守居方へ手形差出（後略）	
	16	1703	常安町	D-E
正徳	5	10・16	1715 御蔵前有たゞき石岩焼石井ニ水道眞修復（後略）	C
	9	3・21	1724 妙智庵に、罹災の記述なし	B・C
享保	12	1727	大坂御召川御座船・同御召舟・御台所船・御家老船とも四艘（後略） 於大坂去々辰歳被仰付候三枚帆・四枚帆之小早新造式艘之御船諸道具・御地留守居ニ被仰付候	A
	20	10・29	1735 大坂御屋敷ニ有之御召川御座船・御召舟外之御船共・古來之通大坂御留守居	
寛保	2	10・8	1742 大坂御買米奉行へ被仰出覚 若山堀之丞儀、此度大坂御弘米御用方御目付被仰付候水門出入之儀、夜ニ入派方之者・百姓・船頭願出候ハハ、御留守居申談（後略）	A
		10・00	若山堀之丞儀、大坂御買米御用御目付並御屋敷諸事御目付後共被仰付候（後略） 御參勤交代大坂着之節、御留守居ハ御船にて御迎ニ罷出申候、私儀御玄関へ罷出（後略）	
延享	4	1747	常安町	B
	4	7・00	1775 岡田次八 大坂御留守居手代より召出	F
安永	6	1777	常安町	B
	8	9・23	1779 大坂御屋敷御座外及大坂・御總司被仰付候（後略）	A
寛政	2	9・23	1790 大坂御屋敷諸事御目付御指止	C
		9・24	大坂御留守居森甚作	A
享和	1	1801	常安町	B
	3	9・19	1803 大坂御屋敷御蔵之儀諸式御取御用被仰付（後略）	A
文化	2	3・17	1805 竹内市左衛門 大坂御留守居より召出	F
	4	11・11	1807 京・大坂注並在番又ハ当分御用ニ罷越居申面々年始並不時恐悦伺之儀、已後御留守居長屋へ罷出申上（後略）	A
	11	1814	常安町	B
天保	6	1835	越中橋北詰	B
	14	1843	常安町	D
文久	3	1863	常安町越中橋北詰東	D

月・日欄の00は日付不明 A:『藩法集3』 B:『大阪細年史第26巻』 C:『徳島県史料第1巻』 D:『中之島誌』 E:『新修大阪市史第3巻』 F:『徳島藩士譜』



図-2 元禄16年徳島藩大坂蔵屋敷の位置

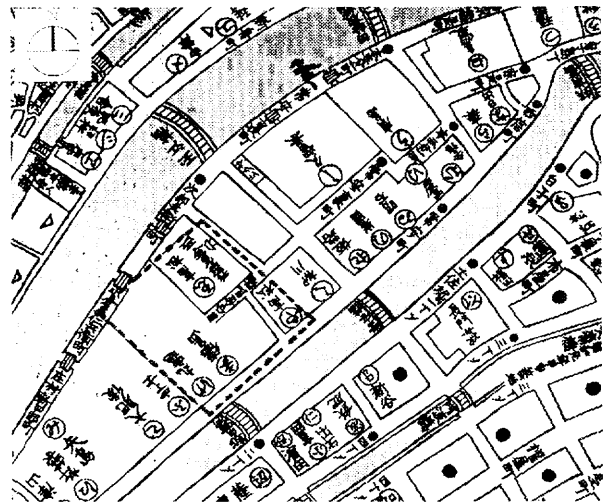


図-3 文化3年の徳島藩大坂蔵屋敷の位置

のは、所有者の記載がない土地（図-4の★印）であると考えられる。

徳島藩は、延享4年以降は常安町、天保6年には越中橋北詰、文久3年には越中橋北詰東にあり、これらの位置は図-3と同様である。すなわち、徳島藩蔵屋敷は元



図-4 貞享4年の徳島藩大坂蔵屋敷の位置

禄16年、姫路藩蔵屋敷は安永6年以降同場所で継続してきたのである<sup>註8)</sup>。なお、松平大和守の西隣の京極備中守は丸亀藩主で、同屋敷は延宝7年より文久3年まで同場所で継続している<sup>註9)</sup>。

姫路藩が、藩主の交代により貞享4年以降に常安町の蔵屋敷を手放したとすると、元禄4年に常安町に屋敷を普請した徳島藩が同16年までの間に買得した可能性があるが、同藩が買得したことを示す資料は現時点では見いだせていない。

表-1の寛保2年(1742)には、夜間における水門出入りの願いが出されている。水門とは船入と川との境に設けられた門のことで、この時期に船入が設けられていたことが判明する。図-4の松平大和守屋敷は、堂島川の寄りの敷地が区画されて描かれている。同所は、図-1では船入や米会所などに該当する箇所であり、堂島川の改修を契機に屋敷を拡張させて<sup>註10)</sup>水門と船入を設けたと推測される。

徳島藩蔵屋敷は、享保9年(1724)ならびに寛政4年(1792)の大火の際に同藩屋敷は罹災していない<sup>註11)</sup>ことから、絵図に描かれた屋敷は享保9年の大火以前まで遡る可能性がある。同屋敷では、安永8年に蔵が修繕されているように、諸施設は補修や増改築などが行われてきたと考えられるが、拡張後の敷地は大きな変化もなく継続され、明治末年には同所に住友伸銅所分工場が設けられている。なお、船入前の橋は「徳島橋」、東隣の高松藩では「高松橋」と記載されている<sup>註12)</sup>。

### 3 大坂蔵屋敷の建築構成

図-1をもとに作成したCAD図面を図-5に掲げる<sup>註13)</sup>。同図をもとに徳島藩大坂蔵屋敷の建築構成などを見ていくことにしたい。

#### 1) 建築構成

敷地は、絵図の記載によると延べ4809坪余で、北部の

大きな長方形の敷地(大区画)と南部の小さな長方形の敷地(小区画)が食い違って接続している。

大区画は、北面の西部から中央にかけて水御門・米役人住居・裏御門など、東部には蔵、また東西面の敷地境に沿って1/3程度まで土蔵が配されている。そして敷地の北西隅に船入、船入と東側の土蔵の間に米会所・米廻場が設けられている。

大区画の中央部には、留守居部屋の南部に御殿が隣接して配され、双方ともに東側を塀で仕切って独立性を高めている。東面の敷地境に沿って長屋・留守居家来部屋・勘定所などが南北に、さらに南面には作事所などが配されている。

小区画は、南西隅に表御門を設け、南面・東面に役人長屋、中央部西寄りの南北に長屋を配し、その西側を「中御門」への通路としている。

すなわち同蔵屋敷は、概ね大区画の北約1/3が米穀などの取引のための業務施設、他は御殿・留守居部屋・長屋などの居住施設、小区画は大区画への通路と役人などの居住施設で構成されている。なお、業務施設の建築構成は、西国諸藩の蔵屋敷と大きな差異は見られない<sup>註14)</sup>。

#### 2) 居住施設

##### (1) 御殿

西国諸藩の蔵屋敷の独立した御殿が、接客・居住・役所・台所空間で構成されていたことや、御殿における各空間の位置、室構成・規模などはすでに明らかにした<sup>註15)</sup>。ここでは、まず徳島藩蔵屋敷の御殿(図-6)の各空間の構成を明らかにし、次いで諸藩御殿の平面との比較検討を行いたい。

##### ①各空間の構成

**接客空間** 接客空間は、御殿中央の西部に配されている。東南部の玄関から「遠待」(27畳)、「御縁通」(16.5畳)を経て、「御次」(18畳)と「御座敷」(15畳)の2室で構成されている。「御座敷」は床を設けて格式が整えられ、西北部の折廻りの「御縁通」(34.5畳)を介して庭が設けられている。

**居住空間** 居住空間は、御殿中央の西部に位置する接客空間に南面して配され、「御次」(12.5畳)、「御居間」(10畳)の2室で構成されている。「御居間」の西部に「御茶間」(4畳)、便所や風呂は西南部、庭は東南部に設けられている。

**役所空間** 役所空間は、御殿中央東部の北部に配されている。「小玄関」から座敷(18畳)を経て、「御用所」(18畳)と「御役所」(12畳)などで構成されている。さらに御殿外、大区画東南部の隅に「御勘定所」(13畳)と土蔵が設けられていることから、御殿では交易などの交渉などが行

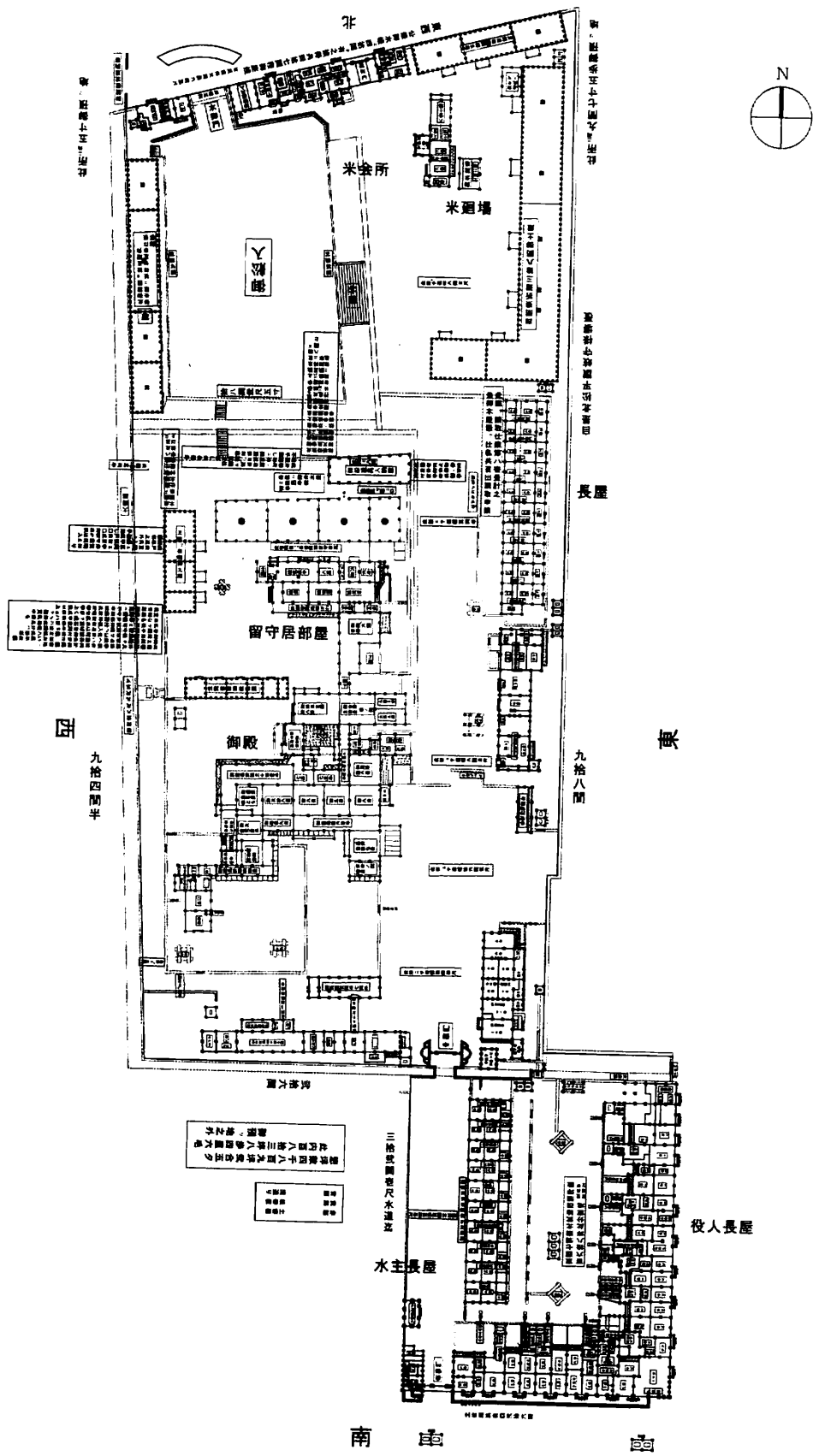


図-5 徳島藩大坂蔵屋敷CAD図面

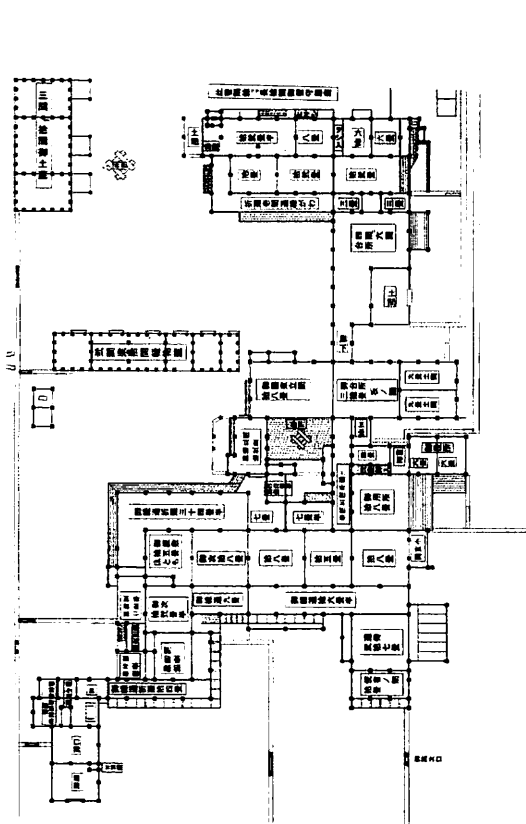


図-6 徳島藩大坂藏屋敷御殿

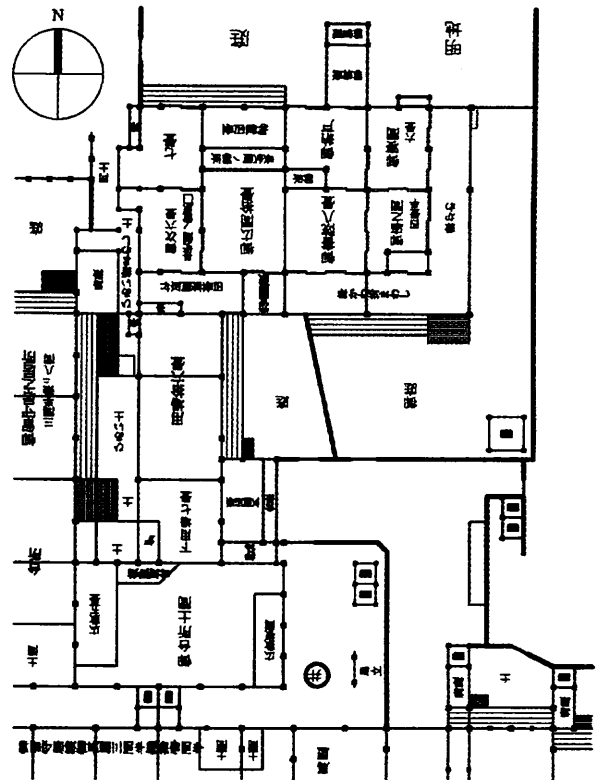


図-7 岡山藩大坂藏屋敷御殿

われ、実務的な仕事は「御勘定所」で行われたと考えられる。なお、「御勘定所」に付随する土蔵は銀蔵と推察される。

**台所空間** 台所空間は、役所空間の北部に配され、「御台所三拾畳板ノ間」「御膳煮立間拾八畳」「土間」などで構成されている。さらに、「御台所三拾畳板ノ間」は「留守居部屋」の台所と廊下で繋がっている。

以上、徳島藩御殿の各空間の構成を見てきた。接客・居住空間はともに2室構成で、御殿西部の最奥に配されているため、玄関からの動線が長くなっている。居住空間には、居間の他に茶室が設けられるなど、居住性に配慮されていることが窺える。また、接客空間と居住空間が隣接していて、空間相互の分離が不明確であることが判明した。役所空間は、御殿中央東部の「小玄関」の北部に隣接して配されているが、御殿外にも「御勘定所」などが設けられ、業務の分担が図られている。台所空間は、役所空間の北部に隣接して設けられるとともに、留守居部屋の台所とも繋がり、ここで屋敷内の食事を賄っていたと思われる<sup>216)</sup>。

②諸藩御殿の平面

享保9年の大火では多くの蔵屋敷が罹災した。佐賀藩では、罹災を機に屋敷が再建され、御殿の平面が大きく

変化した。ここでは、大火前後の御殿の平面をもとに、徳島藩御殿の平面を考察する。

享保9年の大火以前の平面 貞享3年ころの岡山藩の御殿(図-7)は、「玄関」と庭を囲むように各空間がコの字形に配置されている。接客・居住空間は北部に配されているが、相互の分離が不明確で、前者が「御広間」「御書院」「御座之間」の3室構成で南面しているのに対し、後者は「御寝間」のみで北面するなど、居住性に欠けている。

元禄5年から大火前までの佐賀藩の御殿(図-8)は、数度の増改築を経て、「御玄関」から接客空間である御書院までの動線が明確となっている。また、役所・台所空間が「内玄関」付近に、居住空間が御殿西部の最奥に配されて居住性に配慮されるなど、各空間の機能による配置が窺われる。さらに、中庭を配して接客空間と役所空間が明確に分離されている。

以上のことから、大火以前の平面は、岡山藩のように各空間の分離が不明確で諸室が連なる形態から、佐賀・広島藩のように、玄関付近に接客空間、最奥に居住空間、小玄関付近に役所・台所空間を配し、中庭を設けて空間の分離と日照・通風、居住性などが配慮された形態に変化していることが指摘できよう。

罹災後の平面 罹災後に再建された佐賀藩の御殿(図-

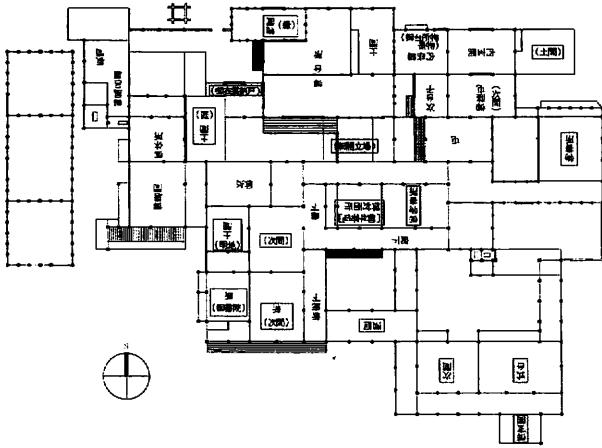


図-8 佐賀藩大坂蔵屋敷御殿

9) は、役所が独立して別個に設けられたため、御殿は接客・居住の機能が明確になった。そして、罹災以前よりさらに多くの「明地」(中庭)を設けることで、各空間の独立性が高められるとともに、日照・通風などにも配慮された、居住性の高い形態が形成された。徳島藩御殿の平面 徳島藩では、御殿中央の西部に接客・居住空間、中央の東部に小玄関を設け、その北部に役所・台所空間が配されている。

同藩御殿の平面は、空間の分離という点からは大火以前の佐賀藩の形態に近いが、中庭を設けずに諸室を連ねる点や接客・居住空間の分離が不明確である点からは岡山藩に類似しているといえる。すなわち、徳島藩御殿の平面は、空間分離が不明確な岡山藩から、中庭を設けて空間分離を明確にする佐賀藩に至る過渡期的な形態ではないかと考えられる。

(2) 留守居部屋

留守居部屋は、御殿の北側に廊下を介して隣接している。留守居部屋の接客空間は、南西の折廻り縁側に「拾式畳」の次の間、「拾畳」の座敷の2室で構成されており、小規模ではあるが御殿の接客空間と類似の空間構成をしている。

居住空間は、接客空間の北部に接して東西に4室が配されている。接客空間が南面していることから、留主居部屋での接客の比重が大きかったことが窺われる。

(3) 長屋

役人の住居は小区画の南東面に配された長屋で、中央部の南北方向には水主長屋、さらにこれと同規模のものが大区画の東面中央部付近に配されている。2棟の長屋は6畳2室に土間の構成で、総数20戸である。

役人長屋の室構成を表-2に示す。同表によると、五間口の留守居手代竹内市左衛門宅が室の延べ面積が16.5坪で最大、最小は三間口の10.5坪、平均12.2坪である。

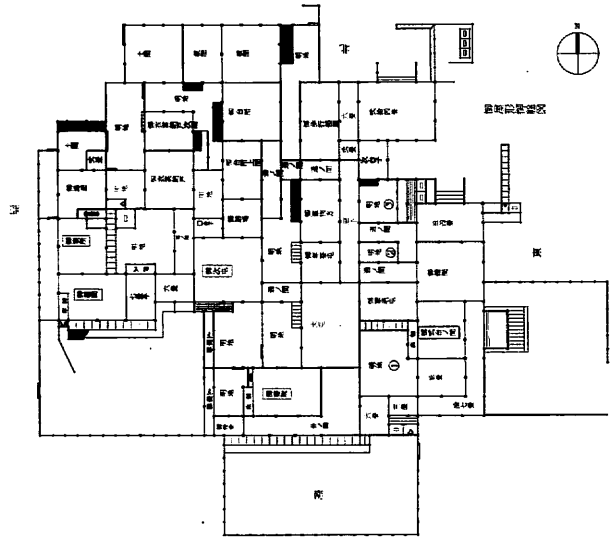


図-9 佐賀藩大坂蔵屋敷御殿

三間口は6畳を中心に構成されているが、四間口・五間口は8畳が主となる。また、三間口には8畳より大きな室が見られないことから、居住者の階層差が窺われる。なお、各長屋には便所と行水場が設けられているが湯殿はない。

表-2 役人長屋の室構成

規模(畳)	室(畳)										設備など		住人	
	5	7.5	10	5.5	5	4.5	4	3.5	3	2	土庫	便所/行水場		
五間口	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	33	○	○	竹内市左衛門
	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20	○	○	小寺五兵衛
四間口	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	6	共同	不明	堀橋伊兵衛
	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	21	○	○	内保半次
三間口	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	23.5	共同	○	北井忠政
	2	1	2	1	-	-	-	-	-	-	24.7	○	○	松村屋内
留守居	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-	24	○	○	中井俊樹
	2	-	3	-	-	-	-	-	-	-	23.5	○	○	小寺五郎
三間口	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-	22.5	○	○	佐野友衛門
	2	-	3	-	-	-	-	-	-	-	21	○	○	尾田徳之丞
三間口	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-	21	○	○	宇野金左衛門
	2	-	3	-	-	-	-	-	-	-	21	○	○	尾田八

(4) その他

大区画の西面中央部に稲荷堂、南面に作事場、勘定所に並んで貸長屋が設けられている。

4 まとめ

徳島藩は、江戸時代前期の寛文年間到大坂に屋敷を設けたが、売却や移転を経て、元禄4年に土佐堀に蔵屋敷を設けた。その後屋敷を買得し、寛保2年には船入を持つ屋敷数となっていた。この屋敷は、享保9年・寛政4年の大火にも罹災していないことから、絵図に描かれた屋敷の建築時期は、享保9年以前に遡る可能性がある。

同蔵屋敷絵図は、4分計の着色貼図で、記載された人物名より文化2年以前に作成されたと考えられる。絵図によると敷地は4809坪余で、これは約8300坪の熊本藩蔵屋敷にはおよばないが、高知藩(約4500坪)、佐賀藩(約



4200坪)より大きく、諸藩の大坂蔵屋敷の中では最大規模のものであった。

敷地は大小の2区画に分かれる変則的な形態で、大区画は、御殿・留守居部屋などの居住施設、船入・米蔵・米会所などの取引上の業務施設などで構成され、小区画には主に長屋が配されていた。

御殿は、西国諸藩と同様に接客・居住・役所・台所の各空間で構成されていた。その平面は、中庭を設けずに室を連ねる平面形態は岡山藩の御殿に類似しているが、佐賀藩のように中庭を配して各空間を分離するに至っていないことから、室を連ねる形態から中庭を設けて空間を分離する形態に至る過渡的な形態と考えられる。

留主居部屋は御殿と接続して設けられ、接客空間が確保されていた。役人長屋は間口によって規模が異なり、住人の階層性が窺われる。

絵図の閲覧調査に際し、徳島市立徳島城博物館主任学芸員根津寿夫氏には種々ご高配を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

## 註

- 1) 佐古慶三「広島蔵と鴻池」(『広島商大論集第5巻1号』1964年10月)、宮本又次「大阪の岡山藩の蔵屋敷史料の紹介」(『大阪の研究第2巻』清文堂、1968年)、森泰博「鳥取藩大坂蔵屋敷の成立」(『商学論究第37巻1・2・3・4合併号』1989年10月)、「初期の高知藩大坂蔵屋敷」(『経済学論究第44巻第3号』1990年12月)などの一連の研究。「広島藩大坂蔵屋敷跡」(大阪市文化財協会1997年3月)、「旧佐賀藩大坂蔵屋敷船入遺構調査報告」(大阪市文化財協会、1991年3月)、伊藤純・豆谷浩之「新出広島藩大坂蔵屋敷について—浅野文庫本絵図の紹介」(『大阪の歴史第51号』大阪市史編纂所、1998年)、八木滋「大坂中之島図—蔵屋敷関係資料—」(『大阪歴史博物館研究紀要第3号』2004年10月)、豆谷浩之「17世紀中葉における諸藩の大坂屋敷について—大坂三郷町絵図を中心に—」(『大阪歴史博物館研究紀要第3号』2004年10月)、渡辺忠司「大阪三郷町続き在領における蔵屋敷の設置について」(『大阪の歴史第51号』大阪市史編纂所、1998年5月)など。
- 2) 谷直樹・伊勢戸佐一郎「佐賀藩大坂蔵屋敷の建築と年中行事」(『大阪の歴史第25号』1988年10月)、谷直樹・俵敬子「岡山藩大坂蔵屋敷の建築指図について」(『日本建築学会中国支部研究報告集第16巻』1991年3月)、拙稿『近世大坂における蔵屋敷の住居史的研究』(私家版、2000年)、谷直樹他「大坂蔵屋敷の住居史的研究」(住総研『研究年報NO.28』2001年版)、拙稿「大坂蔵屋敷の年中行事と蔵屋敷祭礼について—島原藩・佐賀藩を中心に—」(『大阪市立大学生活科学研究誌Vol. 3』2004年)など。
- 3) 個人蔵。同絵図は、特別展「水の都徳島再発見」(徳島市立徳島城博物館、2007年10月27日～11月25日)に出展され、同展覧会の図録でも紹介されている。
- 4) 諸藩の大坂蔵屋敷絵図に関する筆者らの調査によると、紙面に描かれた碁盤目状の罫線上に、建物や施設などの色紙を貼り付けた着色貼図は、岡山藩大坂蔵屋敷図(慶安元年=1648)や佐賀藩大坂蔵屋敷図(元禄5年=1692)に見られ、以後は紙面に直接絵図を描いた書図が多くなる。徳島藩大坂蔵屋敷絵図の作成年代は、宮本武史編『徳島藩士譜』(同刊行会、1972年)より、文化2年以前と推定されるが、その年代が新しいことから、同絵図は古式な図法で描かれていると言える。
- 5) 『国史大辞典第10巻』(吉川弘文館、1992年)
- 6) 出典は以下の通りである。A:『藩法集3』(石井良助編、創文社、1962年)、B:『大阪編年史第26巻』(大阪市立中央図書館、1978年)、C:『徳島県史料第1巻』(県史編纂委員会、1964年)、D:『中之嶋誌』(臨川書店、1974年)、E:『新修大阪市史第3巻』(大阪市、1989年)、F:前掲4)『徳島藩士譜』
- 7) 前掲6) B:『大阪編年史第26巻』所収「諸大名御屋敷付」
- 8) 前掲6) B:『大阪編年史第26巻』所収「諸大名蔵屋敷一覧」
- 9) 前掲8)「諸大名蔵屋敷一覧」、前掲6) D:『中之嶋誌』
- 10) 貞享3年の堂島川の改修により、佐賀藩は約900坪、岡山藩は約254坪を整備拡張している。前掲2) 拙稿『近世大坂における蔵屋敷の住居史的研究』
- 11) 『大阪編年史第7巻』(1969年)、『同第13巻』(1971年)
- 12) 『大阪地籍地図』(吉江集画堂、1911年)
- 13) 掲載したCAD図面は、見易くするため、絵図に描かれた碁盤目状の罫線を省略している。
- 14) 前掲2) 谷直樹他「大坂蔵屋敷の住居史的研究」、拙稿『近世大坂における蔵屋敷の住居史的研究』
- 15) 14)に同じ。
- 16) 前掲6) D:『中之嶋誌』には、「室は別なれど食事は台処で一緒にする仲間部屋があつて」とあり、一括して賄いが行われていた様子が記されている。

---

## 徳島藩大坂蔵屋敷の建築構成について

植松 清志、谷 直樹

要旨：本研究では、徳島藩大坂蔵屋敷絵図をもとに、絵図の作成年代、同屋敷の変遷、建築構成などの考察を行った。その結果、敷地の北部1/3が船入、蔵、米会所などの業務空間、中央部が御殿、留守居部屋、長屋などの居住空間、南部が役人などの居住空間であったことが判明した。